

〈故人をしのぶ〉

山田 穰理事長のご逝去を悼む

ご略歴

- 大正8年6月 第五高等学校第2部乙類卒業
〃 11年3月 九州帝国大学工学部採鉱学科卒業
昭和14年1月 工学博士
〃 14年8月 九州大学工学部教授
〃 26年7月～28年6月 同学工学部長
〃 28年11月～32年11月 九州大学学長
〃 37年1月 九州大学名誉教授
叙位、叙勲
昭和43年4月 勲一等瑞宝章
〃 60年12月 正三位

当協会初代理事長山田 穰先生には昭和60年12月4日ご逝去されました。享年87歳と11ヵ月のご生涯でありました。ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

顧みれば、昭和47年2月2日、当協会が財団法人として福岡県から認可されるや、そのシンボルとして先生をお迎えしたいというムードが私ども設立発起人の間に期せずして起こりました。幸いに私は、先生との個人的な誼みの故をもちまして、畏友細川巖君と一緒に今川橋の先生のお宅を訪れ、ご就任のご快諾をいただくことができました。当協会が設立直後から、財界、官界ならびに一般の社会人からも絶大な信用と信頼をもって受け容れられたのは、山田先生というこの上もないご立派な理事長をお迎えすることができたか



らにほかなりません。当協会は、公益性を理念とするため、その定款（寄付行為）には「理事長無給」という条項を余儀なくされました。しかし、先生は金銭的には誠にご潔白であり、その崇高なご人格には敬服のほかはありませんでした。先生は時間的には大変厳格であり、私どもが理事会に1分でも遅刻すると、厳しくご叱責を喰らいました。また、ある時「竹下君、こんなことでは僕は辞めるよ」という御親書をいただき、慌ててお詫びに参上すると、「ああ、そうだったのか」と、いとも快よく許して下さいました。

昨年の春頃、ご長男の勲造氏が当協会に見えられ、「おやじはもう年だから、ぜひ辞めさせてほしい」という強い申し入れがありました。私どもはやむなくそのご希望を受諾しましたが、いつまでも先生を慕う気持ちに変わりはありません。

先生亡きあとの当協会の将来は誠に厳しいものがあります。しかし、私ども職員一同、先生の御心を心として精進いたす決意であります。どうかいつまでも、お加護とご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

（当協会副理事長 竹下健次郎）

故四宮知郎先生の思い出

ご 略 歴

- 昭和5年3月 東京帝国大学理学部化学科卒業
" 17年10月 理学博士
" 14年6月 熊本高等工業学校教授
" 24年4月 熊本大学工学部教授
" 47年5月 熊本大学名誉教授
" 47年4月 熊本商科大学教授
" 51年4月 九州東海大学教授
熊本県公害対策委員会及び水質審議会（ともに創設時より）会長
熊本県公害防止事業監視委員会（創設時より）会長

私が四宮先生に巡り合ったのは戦後間もない昭和22年春、熊本工業専門学校に入学した時である。人生には幾つかの転機もしくは節目があると言われるが、私は先生によって大きな影響を受け、大学に進学し化学を一生の仕事とするようになった。熊本工専では有機化学の講義を担当されていたが、明快なお話と書家のような綺麗な字に皆引きつけられ、講義室は満員の盛況であった。どのようなきさつかは知らないが、昭和30年代終わり頃から、先生は放射能に興味を持たれるようになり、私と同じ放射化学の道に進まれたので、亡くなる前年まで秋には必ず討論会でお会いしつつも励まして頂いた。恐らく熊本工専、熊本大学の卒業生の中でも私ほど多く、かつ永く先生の教えを受けた者はいないであろう。

先生は講義室や研究室では極めて厳しく、近寄り難い威厳を示されたが、一步教室の外



に出ると柔和で親しみがもて、後にまでも良く卒業生の面倒をみられた。先生に結婚の仲人をお願いした者も数多く、卒業後も同窓会などで四宮先生が出席されると聞くと皆万障繰り合わせて駆けつけたものである。

先生は東大理学部卒の秀才で専門以外の分野でも幅広い知識を持たれ、社会的にも非凡な活動をされ幾多の業績をあげられている。特に公害問題では深い洞察力で企業側を指導し、一般の人々の守り神となられた。また先生の漢詩は有名で、方泉四宮と銘打った高潔優麗な詩は百編以上に及んでいる。

昨年秋の放射化学討論会には珍らしく欠席されていたが、昭和62年度は先生と私が協力して九州で討論会を開催するよう委嘱されたので、熊本へ御報告に行かなければと思って、いた矢先に先生の訃報に接し、一時ただ茫然とするのみであった。最後に先生の詩を一首記して御冥福をお祈りする。

涼秋抱夢來	〔 涼秋夢を抱いて来る。 会友は楼台に満てり。 想は遠し紅願の昔。 猷酬す工和の杯。 〕
会友満楼台	
想遠紅顔昔	
猷酬工和杯	

（九州大学教授、当協会常任理事 高島良正）

故山縣 登理事の訃報に接して

ご 略 歴

- 昭和15年3月 第二高等学校理科卒業
- 〃 18年9月 東京帝国大学理学部化学科卒業
- 〃 25年12月 群馬大学桐生工業専門学校講師
- 〃 26年3月 群馬大学助教授
- 〃 28年3月 理学博士（東京大学）
- 〃 33年12月 群馬大学教授
- 〃 37年4月 国立公衆衛生院放射線衛生学部長
- 〃 60年4月 国立公衆衛生院名誉教授
- 〃 54年2月 原子力安全委員会専門委員
- 〃 54年7月 放射線審議会委員



山縣登氏は、厚生省公衆衛生院放射線衛生学部長を23年間勤め60年春退職、当協会理事に就任された。新聞の報道によると、今年5月4日未明、心不全で中国チベット自治区シガツエのホテルで急逝とのことで、全く驚愕のほかなく、ここに謹んで弔意を表する次第である。

同氏は大正9年東京都で生れ、旧制二高から東大理学部化学科を昭和18年卒業、33年群馬大学工学部教授、37年上記の国立公衆衛生院に就任、退職後同院名誉教授とされた。享年66歳であった。又、54年から原子力安全委員会専門委員、および放射線審議会委員として活躍され、放射線衛生学の権威であった。

同氏は東大時代、故南英一教授の分析化学教室に学び、稀アルカリ元素(セシウムなど)の分析法の研究と共に、温泉水の地球化学的

研究にたずさわった。これは中学以来、化学が好きで、それに登山が趣味であり、二高時代は山岳部員であった。このため、大学では地球化学を志したといわれている。又、今回のチベット訪問も、東北大学山岳部員とOBを中心とする東北大学日中友好チベット学术交流団の一員として訪問中のできごとであった。

同氏のセシウム研究は、後にビキニ水爆実験による第5福龍丸被災の放射能調査をはじめとする放射化学へとすすみ、温泉の地球化学的研究はやがて、南極大陸の不凍湖の研究にまで発展した。これらの学術的活動によって、わが国の地球化学の領域の進歩に大きく貢献をされた。又、多くの著作を通じ、放射能についての啓蒙的活動に努められたことは周知のとおりである。

本協会ではとくに環境放射能部門の発展のため御活躍を願っていたが、いよいよ今からという時にその御急逝にあい、全く残念というほかはない。まことに痛恨の極みである。ここに社会のためにも学会のためにも、そして本協会のためにも、まことに惜しいお方を喪った悲しみをいだきつつ、一言哀悼の意をあらわす次第である。

(当協会副理事長細川 巖)